

鹿島 昌也（埋蔵文化財センター主幹学芸員）

## はじめに

令和 4（2022）年は日本の鉄道開業 150 年という節目の年を迎えたことを機に、各地の博物館や資料館で、鉄道に関連する展示会が催された。富山市郷土博物館では『特別展 富山駅 123 年一街の玄関口から中心へ』が同年 10 月 1 日～11 月 27 日に開催され、その準備段階で、同館学芸員から「市内で汽車土瓶が出土していないか」との問合せを受けた。

駅弁とともに販売されたお茶の容器は、明治期から昭和 30 年代までは主に陶器製で、「汽車土瓶（茶瓶）」と呼ばれ、各地の駅や鉄道沿線で発掘されることがある。明治 32（1899）年に開業した富山停車場（婦負郡桜谷村、現・富山市田刈屋）周辺や明治 41（1908）年に移転した現・富山駅周辺は、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に含まれておらず、発掘調査等は実施されていないため、汽車土瓶使用の実態は不明であった。現・富山駅南の市街地に位置する「富山城跡」発掘調査の出土品中に、これまで 2 点の汽車土瓶を確認できたので本稿で紹介する。

### 1 富山城跡出土の汽車土瓶

平成 26（2014）年に実施した旧総曲輪小学校跡地の総曲輪レガートスクエア整備（総曲輪四丁目地内）に伴う発掘調査の出土品中に、完形品の汽車土瓶 1 点を確認した。近代以降の出土品のため報告書（富山市教育委員会 2017）未掲載品として収蔵庫に保管されていたが、郷土博物館の特別展を契機に初公開、展示図録に写真が掲載された。その後にも新たに同地区から破片 1 点を確認したことから、それらの概要を報告する。

#### 汽車土瓶①

汽車土瓶①は高さ 8.2 cm、口径 3.4 cm、底部は一辺 7.0 cm × 7.0 cm で四隅に幅 2 cm の面を持つ。口径 1 cm の注ぎ口と穿孔のある吊手が 2 か所付随し、把手となる針金が残る。2 か所の穿孔間は 7.0 cm を測る。側面の狭面部分 1 面に「お茶」の浮き文字が施される。畠中英二氏による分類（畠中 2007）では、形態は「吊り下げ茶瓶（土瓶折衷形）」、製作方法は「泥漿鑄込」という型づくりである。外面と口縁内面に透明釉が施され、内面と底部に近い外面と底部は露体で、底部には被熱による煤が付着しており、汁物を温める容器として再利用されていた。美濃焼とみられる。

出土した地点は、明治期に富山城三ノ丸南側の外堀を埋め立てた後、その北肩部分に沿う形で地境を示すために構築された石組み水路（SD01）から、大量の近代陶磁器などと共に出土した。この水路は郷土博物館所蔵の明治 26（1893）年富山市街実測図にみえる。同館所蔵の明治 18（1885）年富山市街見取全図では、水路の表記はなく、外堀が表現されていることから、石組み水路はこの絵図が描かれた後の、明治 20（1887）年前後に構築されたとみられる。汽車土瓶が廃棄されたのは、それ以降の年代と推測される。



写真 2 富山城跡出土  
汽車土瓶①（左）汽車土瓶②（右）

## 汽車土瓶②

汽車土瓶②は破片で残存高 8.0cm、一辺 6.5 cm 以上、厚さ 2~3 mm を測る。側面上部に右横書きによる「鉄道口」、面取り部分に縦書きで「口茶」の「茶」の陰刻文字の一部がみえる。美濃焼と推測され、被熱により破損したとみられる。

出土した地点は、富山城外堀の埋土上層からで、外堀が埋まる明治 20 年頃以降廃棄されたようだ。

参考とした、高山本線下麻生駅付近出土の汽車土瓶と比較すると、汽車土瓶②の文字は「鉄道省」と推測できる。<sup>(1)</sup> 鉄道省は大正 9 (1920) 年に設置され、昭和 18 (1943) に運輸通信省に改称された。

## おわりに

汽車土瓶①②が出土した地点は、富山駅から南に約 130m 離れる。大正 2 (1913) 年には、北陸本線が全線開通、市内軌道線も開通し、駅と市街地が結ばれ、近くには「総曲輪」や「市役所前」、「郵便局前」の電停ができ、裁判所や病院、小中学校などが立地する。また、汽車土瓶が出土した総曲輪の南には旧北陸街道に面した旅籠町があり、江戸期には旅籠宿が複数軒営まれていた。明治期に入り木屋旅館などが開業し、旅籠街の伝統が引き継がれるが、大正 15 (1926) 年の大火灾で街の様相は一変したようだ。汽車土瓶は、このような交通網の発展や街の様相から大正後期～昭和初期に富山駅経由で街を訪れた人が持込み、出土地点周辺に滞在後残された土瓶が再利用され、その後大火などによって破損し、廃棄されたと推測する。

このほかにも発掘調査では、汽車土瓶として用いられる「山水土瓶」など土瓶類が多数出土している。富山の街の近代化とともにたらされた汽車土瓶に、今後も注目していきたい。

## 注

(1) 汽車土瓶には「鉄道局」と陰刻されるものもある（ここでは出土していない）が、「局」は面取り部分（「お茶」文字面の上部）に記されることから、汽車土瓶②の陰刻は「鉄道省」と推測される。

## 文献

大川清 1994 「汽車土瓶の考古学」『月刊考古学ジャーナル』No. 371 ニューサイエンス社

豊田市民芸館 1998 『汽車土瓶』

富山近代史研究会 1999 『近代史研究 第 22 号（富山の交通特集）』

畠中英二編 2007 『信楽汽車土瓶』サンライズ出版

富山市教育委員会 2017 『富山城跡発掘調査報告書』

富山市郷土博物館 2022 『特別展 富山駅 123 年－街の玄関口から中心へ－』



写真 3 富山城跡出土汽車土瓶②(右)

<参考>高山本線下麻生駅(岐阜県)

付近出土汽車土瓶(左)個人蔵

(「鉄道省 認定」「お茶」の文字)